



## 氷見市教育研究所

〒935-0016 氷見市本町 4-9

(氷見市教育文化センター内)

TEL 0766-74-8221 (代)

FAX 0766-72-8122

e-mail kyouikukenkyl@city.himi.lg.jp

ホームページ <http://www.city.himi.toyama.jp/hp/>

menu000000500/hpg000000416.htm



## 四つの「信」

氷見市教育委員会

理事・教育次長

山崎 外美雄

学校は、地域という大海原に浮かぶ帆船に例えることができる。

校長は船長、教職員は船員、子どもたちは大事な乗客と言える。教育目標という羅針盤に従い、子どもたちの自己実現を図るという目的地を目指す。推進力は全教職員の操舵能力と保護者や地域の人たちの理解と協力という追い風である。

さて、教育課題が山積する今日、帆船推進の中核となる教師や組織としての学校に求められる資質とは何であろうか。

教師の資質としては、三つ考えられる。一つは、どのような子どもを育てたいかというしっかりとした教育観をもつこと。二つは子どもへの限りない愛情をもつこと。三つは常に自らの指導技術を高めようと研鑽することである。

一方、組織としての学校に求められるものとしては、全教職員による方向性をそろえた指導体制の確立と保護者・地域との連携協力の推進である。学校の考え方を統一し、保護者や地域に開くことや説明責任を果たそうとする真摯な姿勢は、「信頼関係」構築の要となる。

何年か前、その年の世相を現す漢字に「偽」が選ばれ残念な思いをした。学校経営のキーワードは「偽」とは正反対の「信」（信頼）と言って過言ではない。子どもとの信頼関係、保護者や地域との信頼関係は教師の「自信」につながり、新たな教育実践への原動力となる。この原動力が新たな発想や具体的な取り組みへの「信念」を生み出す。

そして、「信念」に基づいた「発信(行動化)」は、更なる信頼関係を構築する。この螺旋的・発展的関係の推進が学校を活性化する。

ところで、「信頼」という言葉を基盤とした「自信」「信念」「発信」という四つの言葉には、共通して「信」という漢字が使われている。「信」という漢字は、形声文字であり、「人」+「口」+「辛」から成り立つ。「辛」は、「はり」の象形で刃物や刑罰の意味をもち、発言に嘘があれば受刑することを誓うさまから、「誠」の意味を表す。

「誠」といえば、西郷隆盛と共に江戸城無血開城という偉業を果たした勝海舟のことが思い浮かぶ。語録「氷川清話」によると、海舟は会談や交渉において、何よりも誠心誠意の心や態度をもって事に当たることを本分としたそうである。所謂「至誠」を重んじたわけである。

誠に通じる「信」。この「信」が付く言葉四つにあえて順序性を付けるなら、「信念」「発信」「信頼」「自信」とし、中でも「発信」を重視したい。

例え小石であろうとも、その小石を静かな湖面に投げ入れることによって、岸に向かって次第に大きな波が生じる。これと同じである。まず、できることからやってみる、発信してみることが状況改善の第一歩となる。

もちろん、「独善的な発信」は論外である。「確かな信念に基づく発信」をするためにも①自ら学ぶ中で、②仲間や他と交わる中で、③体験する中で、という自己研鑽・同僚性・現場主義を大切にしていきたい。

変化に対応できたものだけが生き残ることができると言われる。前述した「四つの信」は、教育状況の変化に対し、これまでの経験から導き出した自分なりの考え方を言語化したものである。これからも、種々の変化に対応しながら職務を遂行したい。

# 充実した教育セミナー

## 第1回 教育セミナー

8月5日(木)実施

演題 「新しい学習指導要領と小・中連携の現状」

講師 文部科学省教育課程課 教育課程企画室長  
梶山 正司 先生



### 《久目小学校 教諭 瀬戸 美智子》

子どもの学力や生活習慣等の現状を様々なデータで示され、学習指導要領改訂の趣旨がよく理解できた。また、4観点を学力の3つの要素として整理してあり、その評価の在り方についてもよく分かった。

小・中の連携・接続のためには互いに課題を認識し合うこと、授業の工夫、改善に向けて交流し合うことなどの必要性を感じた。家庭学習の習慣化の大切さも改めて痛感したので、積極的に取り組んでいきたい。

### 《十三中学校 教諭 幸塚 憲子》

小・中の連携について、自分自身が日ごろからどれだけ深く意識しているかについて考えさせられた。円滑な接続ができるように、学習面・生徒指導面等の課題を把握した上で、来年度の新入生を迎えたいと思った。さらに、小・中の教員、生徒が直接かかわり合って連携を図るだけでなく、各学校でできることについて話し合ったり、工夫したりしていきたいと思った。小学校で育てられたことを受けとめ、高校へとしっかりつなげていけるように責任をもって中学校の生徒を育てたい。

## 第2回 教育セミナー

8月10日(火)実施

演題 「いのち・子どもに聴く」

講師 京都市教育委員会 指導部長  
柴原 弘志 先生

### 《窪小学校 教諭 夷 優子》

大変分かりやすく歯切れのよい語り口調で、話に引き込まれていった。今、道徳では、体験活動を生かした指導の充実の重要性がいわれているが、話を聞いていて、改めていかに豊かな体験が大事か分かった。しかし、その体験をどう道徳の授業に生かすか、教師がどう取り上げ、かかわらせるか、そこに力量が問われていると思う。

同じ物を見ていても、同じ体験をしていても、感じ方は一人一人違うので、その子に応じた支援ができればいいと思う。この点からも自分自身が心を磨き、感動できる心を忘れないようにしたいと感じた。



### 《北部中学校 教諭 小橋 博美》

体験なき知見は空虚である。知見なき体験は盲目である。授業では、体験活動をすべて取り入れるのは難しいが、自分が体験したことは忘れないということはよく理解している。伝統文化を大切にしよう！という指導内容で「1日浴衣で登校する日」を設けた話(体験してみないと分からない)ではとした。言葉と体験を組み合わせることによってより効果が上がる。柴原先生の話は、根拠がはっきりしていて納得させられることが多かった。

また、今まで、道徳の授業で心のノートをうまく使うことができなかつたり、授業と自然にリンクすることができにくかつたりしたが、今後、心のノートをすみずみまで読んで、豊かな心を持ち道徳教育に対する認識を高めたいと思った。

# 読書から広がる夢フォーラム

国民読書年の年に、読書の輪が学校から家庭、地域へと広がっていくことを期待し、教育関係者・保護者・一般、更に園児・児童・生徒等と500名あまりが参加して行われた「読書から広がる夢フォーラム」。多彩な内容で、いろいろな角度から読書の大切さを考えることができました。参加された皆さんの声を紹介します。

## < 参加者の声 >

### 志茂田景樹氏の 読み聞かせを聞いて

- ・体全体で表現する迫力ある読み聞かせ方に感動した。子どもが絵本の世界へ引き込まれるのが分かる。私も今後の参考にしたい。
- ・大きな挿絵と感情のこもった語りは、物語の世界に楽しむことができ、素晴らしかった。
- ・「本と出会い、感動とともに吸収することによって感受性を養うことができる」という自身の体験から語られた言葉が心に残った。



### 「いずみの会」の影絵を見て

- ・影絵は童謡とマッチしていて、大変素敵だった。日本の童謡をなつかしく聞いた。
- ・一緒に童謡を口ずさみ、心が癒された。歌詞（歌）も読み聞かせと同じように、心を伝えるものだと感じ、子どもたちに伝えたいと思った。

① 志茂田 景樹 氏の読み聞かせ・講演

② 朝日丘小学校の発表「群読・音俳」

③ いずみの会(ボランティアグループ)の実演会「影絵」

④ 南部中学校の発表「図書室の利用」

### 南部中学校の発表を聞いて

- ・教室棟から離れた場所にある図書室でも利用したくなるように工夫されたことがよく分かった。自校の取り組みの参考にしたい。
- ・本の魅力に気づかせる読書活動の工夫と図書室利用の活性化のヒントをもらえてよかった。

### 朝日丘小学校の発表を聞いて

- ・力強い発表に感動した。音俳ではことばの美しさを感じた。
- ・言語に親しむ手本を見せてもらい、積み重ねの大切さを学んだ。



子どもたちの声

### 夏休みの思い出「読書フォーラム」

朝日丘小学校 六年 吉瀧 華南

読書は、私たちの心の栄養です。うれしいとき、悲しいとき、いつも私たちの心をはげましてくれたり、なぐさめてくれたりします。フォーラムでは、自分のセリフが会場のみなさんに伝わるように、話し方や話す速さを変え、工夫しました。

群読や音俳では、六年生全員の気持ちを一つにして声を合わせ、力強く発表しました。このように練習を積み重ね、読書フォーラムで発表できたことを誇りに思います。

### 絵本の世界に浸る楽しさ

南部中学校 二年 尾崎 愛

志茂田景樹さんのお話を聞いて

南部中学校 一年 鈴木 倭文華

志茂田景樹さんの話で一番印象に残っているのは、絵本の「読み聞かせ」です。登場人物になりきって、声の高さや大きさを変え、内容に合ったスピードで話しておられました。また、絵も色彩が鮮やかで、登場人物も引き立ちました。私はぐんぐん話の世界に引き込まれていきました。この楽しさをたくさんの人に知ってもらいたいなと思いました。

志茂田景樹さんの絵本の読み聞かせが心に残りました。特に、「星になったゾウ」の話では、子どものゾウの鳴き声が悲しく聞こえたり、力強く聞こえたりと、場面によって、いろいろな感情が伝わってきました。私も聞いていて楽しくなったり、悲しくなったりと、絵本の世界にとっぷりと浸り、話を楽しみました。また、聞きたいなと思いました。

# 氷見の教育基本方針推進事業「1/2 成人式」

今年度、氷見市の教育基本方針推進事業においては、「夢や希望に向かって自分らしく！」のテーマのもと、小学校4年生を対象に「1/2 成人式」事業を進めています。市の公共施設である博物館・図書館での学習及び夢作文を全小学校共通とし、更に中学校区ごとに工夫した活動に取り組んでいます。

今号では、明和小学校の取り組みを紹介します。

## 1/2 成人式

## — かがやきつづけよう —

氷見市立明和小学校 第4学年

本校では、この機会を生かし4年生の子どもたちに、自分なりの目標を立てて困難なことがあっても乗り越えようと努力する態度を育てていきたいと考えた。4年生に進級した4月、子どもたちと話し合い、クラスみんなで助け合って何事にもあきらめずに挑戦していこうと、学級目標を「かがやきつづけよう」に決めた。この学級目標の実現に向け、総合的な学習の時間を核に他教科・領域との関連を図りながら取り組みを進めている。

9月15日（水）には、市立博物館・市立図書館を見学した。子どもたちは、博物館の見学で昔のくらしや昔から大切にされているものなどを知り、郷土氷見への理解を深め、氷見のよさを感じていた。図書館では2万冊の本があることや、読書や勉強をしている人たちのために静かに過ごすなど公共施設利用の際の規範意識やルールを学んだ。さらに、一人一人が図書カードをもらうことで、これから総合的な学習の時間の調べ学習などに大いに利用したいと意欲を示していた。

ここでは、総合的な学習の時間での取り組みの一部を紹介する。

### 「将来の夢」(総合的な学習の時間)

単元の導入では、家の人から幼いころの自分の様子を聞いたり、2年生の生活科「小さいころのこと知りたいな」で作った巻物などを手掛かりにしたりして、幼いころに比べ、自分にできることが増えて心も体も大きく成長してきていることを実感した。そして、「将来の夢」について話し合い、それぞれ就きたいと考えている職業について調べていくことにした。子どもたちは家族や知り合いの人にインタビューしたり、図書室の本やインターネットで具体的な仕事内容を調べたりしながら夢を膨らませていった。

また、社会科学習でゴミ処理に携わっている人の仕事を見学していくうちに、子どもたちは、どの職業にも大変な苦労があるけれども、人々は工夫しながら仕事を進めていることに気づいた。そこで、単元の導入での「自分の成長」とつなげることで、「小さいころできなかったことも練習しているうちにできるようになってきた。大変なことがあってもすぐにあきらめてしまうのではなく、がんばっていくことが大事だ。」と気づき、今できることをがんばろうと意欲を高めていった。

### 「明和の生き物ちょうさたい —西尾さんとの出会い—」(総合的な学習の時間)

自然豊かな明和小学校の校区には論田川が流れている。生き物が大好きな子どもたちは、この論田川を探検し、そこに棲む生き物を意欲的に調べてきた。その過程で、水生生物に詳しい氷見市生涯学習課学芸員の西尾正輝さんをゲストティーチャーとして招いた。実際に投網を使って魚を捕まえていただいたり、分からないことを教えていただいたりした。また、子どもたちが調べたことを西尾さんに発表する機会も設けた。

これらのかかわりの中で、西尾さんは、「どうしてだろう」と疑問に思ったことを追究していくことのおもしろさや、自分が子どものころの夢についても話してくださった。現在も自分の夢を追い求めている西尾さんの熱い姿に触れ、子どもたちは、自分も目当てや夢に向かってがんばっていききたいという思いを強めた。



＜西尾さんが小学生のころから飼っているカメの話聞く子どもたち＞

\* 今後は、学習してきたことを国語科等の学習と関連させ、パネルや「夢作文」にまとめて他学年や家の人に発表する機会を予定している。